

転滑落者の応急処置

金田正樹

仮に今、あなたのパートナーが岩場から転落し、けがをしたとする。ここは山の中、119番して救急車を呼ぶわけにはゆかない。さあ、あなたはこれからどうしますか？

まず一番大切なことは、あなたがけが人といっしょになってあわてないことである。お茶を一杯飲んでから行動するぐらいの余裕が欲しい場面である。冷静で、おちついた行動は、適切な処置ができ、不安でふるえのとまらないパートナーを元気づけることで、良い結果が生まれる。そのためには山での応急処置の知識を知っておくことが重要である。こんな場面に遭遇したら、まずはけが人をよく観察することである。意識があるのかないのか、どこをどのようにけがしたのか、出血はあるのかないのか、応急処置は必要かどうか、自力で下山できるか、救助を呼ばなければならないか…などなど。つまりここでは私は何ができるか、何をしなければならないか、してはいけないことは何かについて判断しなければならない。そのためにも自分が冷静であることが最も基本的な条件である。

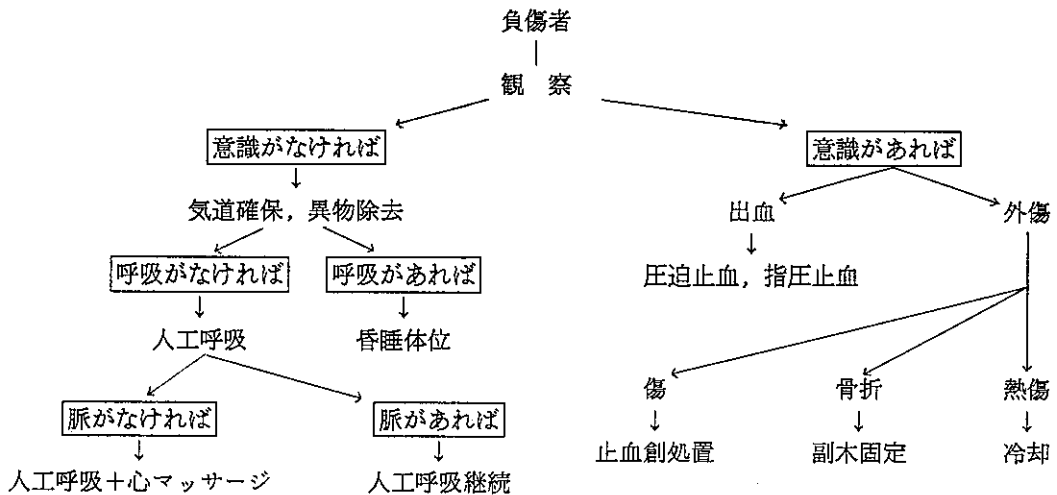


表1 救急処置の手順

1. 精神的ショックの処置

けがをすると誰もが精神的にショックを受ける。顔面蒼白、不穩、不安、冷汗、嘔気、ふるえなどの症状がそれを表している。この状態の時はまだ軽症であり、中等症であり、死に至る重症ではない。意識のレベルが低下して来る時は状態が悪いと判断する。最初にけが人に接した時には会話で意識状態を観察し、脈拍数、呼吸数を数えるいわゆるバイタルサインをチェックすることが大切である。けが人は常に慎重に取り扱うようにする。枕をしないで水平に寝かせる。地面に直接身体が接しないよ

2. 技術研究「危急時と雪崩対策」について

うにシート、寝袋、衣服を敷いてあげる。

次に頭部にけがのない場合は足をやや高くする。けが人が一番楽な体位をとらせることが大切である。保温に注意し、元気づけて安心させることが最も重要なポイントである。意識がはっきりしている時は少量の水やお茶を与えてもかまわない。

2. 止血法

出血したからといってあわてることはない。血液自体の凝固作用によって出血は止まるので、これをより補ってやるのが止血法である。まず基本的には動脈性出血、静脈性出血をとわず、出血部位を指、たおる、布などで強く押さえることである。10分でも15分でもゆるめることなく押さえているとほとんどの出血は止まる。止まるのを確かめたら、圧迫に使用した布をあてたままその上から包帯を巻きつける。止まりにくい出血は傷の近くにある動脈を指で圧迫する。止血は根気よく待つことである。

3. 創処置

浅い傷、深い傷にかかわらず、傷が土砂で汚染されていると病原菌感染の可能性が高くなる。水筒の水をかけて傷をよく洗う。可能

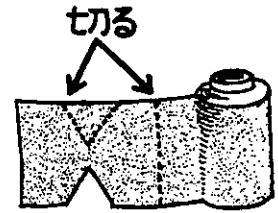
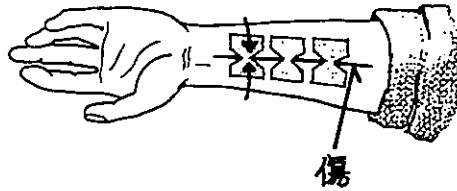


図1

であればコップに水を入れて消毒液（イソジンなど）を数滴入れて、洗い流せばより効果的である。土砂を洗い流した後に傷をよく消毒し、清潔な布やガーゼで覆う。傷が開いている場合は絆創膏でふさぐことができる。絆創膏を蝶々のように真ん中を狭くして切り、これを傷の片側に固定し、傷を寄せ合わせて、反対側も固定する。絆創膏の張力で傷を真ん中によせて傷をふさぐことができる。この方法はあくまでも応急処置であるから下山後は医師の手当を受けなければならない。

4. 骨折の処置

骨折しているかどうかを山の中で判断することはむずかしい場合がある。骨折しているかどうか判らない時は骨折していると思って応急処置をする。骨折は最初の応急処置が肝

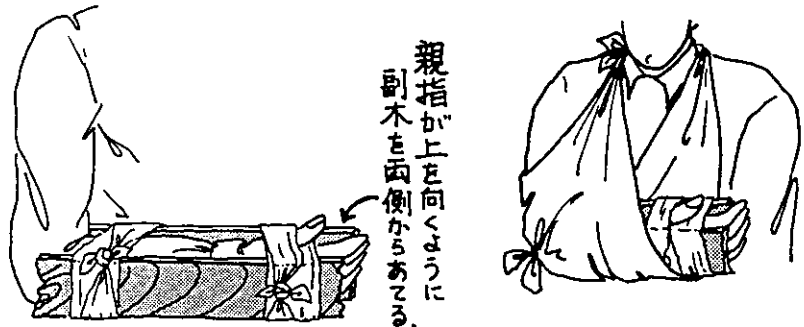


図2 前腕骨折の固定法

2. 技術研究「危急時と雪崩対策」について

心である。骨折部にきちんとした副木を当てて固定すれば痛みが止まり、本人は楽になる。それまでは動かしたり運搬しない。骨折は局所に痛みがあって、はれて、内出血し、変形し、足や手の運動ができないなどの症状がある。四肢の骨折の場合は折れたと思われる場所の上下2関節を固定する。例えば前腕の骨

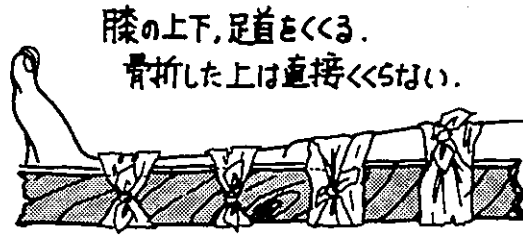


図3 下腿骨折の固定法



図4 大腿骨折の固定法

折であれば手首の関節と肘の関節を固定することになる。骨折部にタオルか衣服をあてて、木片、フレーム、ダンボールをたばにしたものなどをあてて固定する。骨折部の上は直接くくらない。上肢の骨折の場合は自力で下山できるが、下肢の場合は搬送する方法を考えなければならない。状況によっては救援を求めることになる。

5. 頭部、胸部、腹部外傷

重要臓器への損傷は重症になりやすい。頭部外傷後に名前を呼んでも返答がなかったり、つねってみても反応がない時は脳障害をおこしていることを示している。瞳孔が大きくなったり、呼吸が不規則になってきた時は生存のみこみがない。山の中で頭部外傷の患者に応急処置をすることは難しい。頭部に外傷を受けたと思われる患者で意識状態がよければその場で保温に気をつけながら救助を待った方がよい。患者を搬出する時は常に意識と呼吸つまり気道の確保に十分注意を払わなければならない。

胸部外傷の中でも肋骨骨折だけのものであればそれほど重症ではない。せき、くしゃみ、深呼吸で痛みが増強し、打った部位に圧痛がある場合は肋骨骨折を疑う。この場合は圧痛点を中心に、呼気の時にサランなど幅の広い布を胸に巻いて固定すると楽になる。呼吸するたびに胸部がペコペコと動くようであれば肺損傷が疑われ、呼吸困難の原因となり、緊急を要する。

腹部外傷もまた危険な状態になりやすい。腹腔内^で出血すると激しい痛みと共にショック状態におちいる。山の中での処置は極めて難しく、これも緊急を要する外傷である。

(東横病院医師スポーツドクター)